

山部赤人「紀伊国行幸歌」の空間把握について

廣川晶輝

一 はじめに

『万葉集』巻六には山部赤人「紀伊国行幸歌」が載せられている。その本文を掲げる。

神龜元年甲子冬十月五日幸_二于紀伊國_一時山部宿
祢赤人作歌一首并短歌

やすみしし わご大君の 常宮と 仕へ奉れる 雑賀
野ゆ そがひに見ゆる 沖つ鳥 清き渚に 風吹けば
白波騒ぎ 潮干れば 玉藻刈りつつ 神代より 然そ
尊き 玉津島山 (6・九一七)

反歌二首

沖つ鳥 荒磯の玉藻 潮干満ち い隠り行かば 思ほ
えむかも
若の浦に 潮満ち来れば 渦をなみ 葦辺をさして (九一八)

鶴鳴き渡る

右年月不_レ記 但_レ稱_レ從_二駕玉津嶋_一也 因今檢_二

注行幸年月_一以載之焉

(九一九)

まず、「テキストの内と外」という点を問題とせねばならない。当該歌の紀伊国行幸について我々は、『続日本紀』神龜元年冬十月条の紀伊国行幸の記事「辛卯(五日)、天皇紀伊国に幸したまふ。……甲午(八日)、海部郡玉津嶋頓宮に至りて、留まりたまふこと十有餘日。戊戌(十二日)、離宮を岡の東に造る。」(傍線、廣川)を必ず読む。当該歌の「常宮」という表現は『万葉集』中では他に「殯宮」を指す二例のみであり、行幸從駕の当該歌において「やすみしし わご大君」の宮としてふさわしくないように捉えられてしまうかもしれない。しかし、右の『続日本紀』には傍線部「離宮を岡の東に造る」とある。テキスト外部によっ

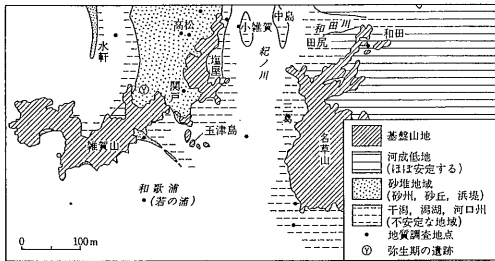
て保証が得られるわけであり、作品がテキスト外部に向けられて開かれている実例となっている。

しかし、テキスト外部の情報が、いわば「もたれ合い」の体で作品の表現理解に利用されてしまうことは厳に慎まなければならない。その一例を示したい。地理学者日下雅義氏の「紀伊湊と吹上浜」³⁾は「万葉のころの和歌浦は、どのような地形環境を呈していたか」を明らかにすることを目的として掲げ、赤人当該歌を例示し「当時の和歌浦付近の地形環境を解明するうえで、参考になる点が多い」と述べる。そして、「赤人の歌にもあるように、付近一帯には潮の干満によって見えかくれするタイダル・フラット（陰顕泥地）が広くひろがり、玉津島（沖つ島）は満潮時には完全に陸地から分離される小島をなしていた」とまとめる。当時の地形の解明を目指す地理学の論文の根拠として、当該歌の歌表現を利用するわけである。一方、北山茂夫氏「神龜年代における宮廷詩人のあり方について——山部赤人、その玉津島讃歌の場合」³⁾では、北山氏が日下氏に一九七六年の夏のある日に電話を掛け「端的に、玉津島が八世紀ころには、島であったかどうかを尋ね」た旨が紹介され、日下氏が現地で実地調査を行なった成果として日下氏から提供された地図（下掲地図）を「万葉時代の和歌浦（日下雅義作製）」と題を付けて示したうえで、「日下地図は、紀ノ

川の主流が和歌浦に注いでいるという古代地理的状况を明示する。通称玉津島がほかの小島とともに海中にうかぶ。

その小島群こそが赤人のうたった『奥つ島』である。この地図では四島から成る」と述べる。しかし、赤人当該歌のテキストに存在する「沖つ島」の記述からは、それが「四島」であるとは決して判らない。地理学者は当時の和歌浦付近の地形環境を解明したいので赤人当該歌を利用し「想定地図」を作成する。一方の万葉学者はその「想定地図」を利用する。ここには「もたれ合い」がある。新編日本古典文学全集版『萬葉集』も、「和歌浦旧沿岸（日下雅義氏他の原図に基づく）」と注を付けて地図を載せる。注釈書に地図が載せられていると、それが「想定地図」であることを忘れて、歌表現が分ったようになってしまうのも事実だ。

ここで、ふたたび「テキストの内と外」という問題を提起しなくてはならない。つまり、



テクスト理解の基本中の基本に立ち戻らねばならない。
 (当時の実際の状況)と(作品内でどう作品世界が構築されて
 いるか)とはそもそも別だ。本稿は、実地踏査研究の有効性を否定するつもりは全くない。しかし、実地踏査研究によつてすべてが分つたように感じてしまふ「陥穽」にもまた、我々は自覚的ではなくてはならないと考える。早く、久米常氏氏「万葉集自然誦詠における仮構性」⁽⁵⁾は自然を歌う際の「仮構性」を指摘し、坂本信幸氏「赤人と自然」⁽⁶⁾は「自然を自然として見る姿勢と、それを作品として形象化することには、また別の問題があるのである」と指摘した。これらの指摘がきわめて端的に、「テクストの内と外」の問題を示している。こうした点を十分に考え合わせて本稿は、当該歌で作品内の空間がどのように把握され描き出されているのか、そして、その空間の把握・描写がどのように時間の表出と関わつて讃歌としての機能を果たしているのか、これを分析したい。

二 「やすみしし わご大君の 常宮と
 仕へ奉れる 雑賀野」

まずは、長歌冒頭部分の「わご大君の」の「の」の解釈が割れているので、その部分の理解から始めたい。坂本信幸氏「赤人の玉津島徒駕歌について」⁽⁷⁾は主格に捉え、天皇

が神にお仕えすると理解した。これに対して村山出氏「玉津島の讃歌——基礎的考察——」⁽⁸⁾は巻2・一五五番歌と同じ構造であるので通説のように連体修飾格と捉えて問題は無いと論じ、廣岡義隆氏「赤人の若の浦讃歌」も『万葉集』中に天皇自らが「仕へ奉る」表現は他に無いと指摘した。村山論文や廣岡論文の指摘を取り入れるべきであり、ここは、「大君の常宮として、我々臣下が仕え申し上げているところの雑賀野」と理解しておこう。

三 「雑賀野ゆ そがひに見ゆる 沖つ島」

(一)「そがひに見ゆる」

『万葉集』中の「そがひ」の用例は次に示すように、当該歌を含めて十二例ある。

繩の浦ゆ そがひ(背向)に見ゆる 沖つ島 漕ぎ廻る舟は 釣りしすらしも (3・三五七)

武庫の浦を 漕ぎ廻る小舟 粟鳥を そがひ(背)に見つ つ ももしき小舟 (3・三五八)

佐保川を 朝川渡り 春日野を そがひ(背向)に見つ つ あしひきの 山辺をさして 夕闇と 隠りましぬれ (3・四六〇)

天さがる 鄙の国辺に 直向かふ 淡路を過ぎ 粟鳥を そがひ(背)に見つ つ 朝なきに 水手の声呼

び 夕なぎに 梶の音しつつ： (4・五〇九)

やすみしし わご大君の 常宮と 仕へ奉れる 雑賀

野ゆ そがひ(背七)に見ゆる 沖つ島 清き渚に： (6・九一七 当該歌)

我が背子を いづち行かめと さき竹の そがひ(背

向)に寝しく 今し悔しも (7・一四二二)

筑波嶺に そがひ(曾我比)に見ゆる 葦穂山 悪し

かるとがも さね見えなくに (14・三三九二)

かなし妹を いづち行かめと 山菅の そがひ(曾我

比)に寝しく 今し悔しも (14・三五七七)

朝日さし そがひ(曾我比)に見ゆる 神ながら み

名に帯はせる 白雲の 千重を押し別け 天そそり

高き立山： (17・四〇〇三)

：鳥狩すと 名のみを告りて 三島野を そがひ(曾

我比)に見つ 二上の 山飛び越えて 雲隠り 翔

り去にさと 帰り来て しはぶれ告くれ： (17・四〇二二)

ここにして そがひ(曾我比)に見ゆる 我が背子が

垣内の谷に： (19・四二〇七)

大君の 命恐み 大の浦を そがひ(曾我比)に見つ

都へ上る (20・四四七二)

「そがひ」は、下河辺長流『萬葉集管見』以来、後ろ向

き・後方・斜め後方と捉えられて来た。これに対し、山崎良幸氏「『そがひに見ゆる』考」は「そがひ」の「そ」と「そく」「そき」「そきへ」における「そ」との間に「意義的類推」を想定し「遙か彼方」の意味を見出そうとした。

しかし、無理があることは否めない。論者自身も「そく」に「ふ」が加わり「そかふ」となり、その連用形が名詞化して「そかひ」となった道筋を一度考えてもみた。しかしこれでは濁音「が」を説明し尽くせないことを自覚した。

小野寛氏「『そがひに』考」は「遠く離れてゆくイメージ」を、前掲坂本氏「赤人の玉津島従駕歌について」は「互いが離反する、背反する、対峙する意」を指摘し、背後・後ろ向き説を否定した。吉井巖氏「萬葉集『そがひに』試見」は漢籍の「背向」が前後を表していることから、翻訳語として「前後」「向つたり背にしたりする」意と捉え、

「五つの鳥々が前後に見渡される、その見えかたを表現した」と説明した。しかし、テクスト外の情報を「もたれ合い」の体で表現理解に利用してしまうこととなりかねない

この見解は取り入れられない。

近時、垣見修司氏「そがひ追考」が提出された。垣見論文は池上啓氏「ソガヒについて」の「二者が離れている状態を示す」という見解を支持し、また、「そがひ」の表記に用いられる漢字「背」に、「何らかの対象との間に距離

—隔たりを生じ、二つがお互いに干渉せず、相容れない関係にある」という意味を見出した。そして「そがひ」にも同様の意味を想定し、「遠く離れたところ」「はるか彼方」と捉えることを提言した。この「距離」の把握は一四二二番歌にも有効である。鉦で竹を割いた時のことを想起しよう。「さき竹の」はその行為・状態の比喩表現である。鉦で割いた竹は、竹の丸みを背中合わせにするわけではない。この歌の男女には、せつかくの共寝であるのに何かの諍いがあったのであろう。寄り添うことをせずに離ればなれに寝てしまったことが歌われているのである。「背」の字が使われているからと言って、強いて「背中合わせ」と捉えなくてもよいのだ。この歌に男女間の「距離」が主題となっていることは示唆に富む。他の歌々も、それぞれの歌の中に「距離」が内在していることについては動かない。本稿は垣見論文の見解を支持し、「そがひ」が用いられる歌の中には「距離」が内在していることを確認しておきたい。

(二)「ゆ・見ゆ」

当該歌は「雑賀野ゆ そがひに見ゆる」と歌われる。この「ゆ・見ゆ」について考察しよう。清水克彦氏「赤人における叙景形式の変遷——仮称「原赤人集」の構造から——」¹⁵⁾は、『雑賀野』がたんに景を見る場ではなく、『沖つ島』

と向かい合っている場所として、立体的な景の一極に組み込まれる」と指摘する。しかしやはり当該歌では、「雑賀野」から見えているわけであり、そこから「沖つ島」が見えていると歌われている。この点から離れてはならない。その意味で、前掲小野論文が「作者赤人の立つ地点を示してそこから見る沖の島を歌った」と指摘し、『ゆ』はその視点の出発点を表わす」と指摘していたことは貴重である。我々は、「雑賀野ゆ」と歌うことの機能を見出しておくべきであろう。

当該歌の表現分析を進めよう。当該歌と同様に「ゆ（よ・ゆり・より）：見ゆ（見る）」という表現を採っている、『万葉集』中の当該歌以外の用例を見てみよう。

天離る 鄙の長道ゆ 恋ひ来れば 明石の門より

大和島見ゆ（一本に云ふ、「家のあたり見ゆ」）（3・255）

武庫の海 船庭ならし いざりする 海人の釣船 波

の上 見ゆ（3・256の一本）

縄の浦 見ゆ そがひに見ゆる 沖つ島 漕ぎ廻る船は

釣りしすらしも（3・357）

名寸隅の 船瀬 見ゆる 淡路島 松帆の浦に 朝

なぎに 玉藻刈りつつ 夕なぎに 藻塩焼きつつ 海

人娘子 ありとは聞けど 見に行かむ よしのなけれ

ば ますらをの 心はなしに たわやめの 思ひたわ

みて たもとほり 吾はそ恋ふる 船楫をなみ (6・九三五)

：淡路の 野島も過ぎ 印南つま 辛荷の島の 鳥の 間ゆ 我家を見れば… (6・九四二)

紀伊の国の 雑賀の浦に 出で見れば 海人の灯火 波の間ゆ見ゆ (7・一一九四)

娘子らが 織る機の上を ま櫛もち 搔上げ栲島 波の間ゆ見ゆ (7・一二三三)

波の上ゆ 見ゆる小島の 雲隠り あな息づかし 相別れなば (8・一四五四)

龜玉の 寸戸が竹垣 編目ゆも 妹し見えなば 吾恋ひめやも (11・二五三〇)

波の間ゆ 見ゆる小島の 浜久木 久しくなりぬ 君に逢はずして (11・二七五三)

波の間ゆ 雲居に見ゆる 粟島の 逢はぬものゆゑ 我に寄せる児ら (12・三二六七)

小筑波の 繁き木の間に 立つ鳥の 目ゆか汝を見む さ寝ざらなくに (14・三三九六)

天離る 鄙の長道を 恋ひ来れば 明石の門より 家のあたり見ゆ 柿本朝臣人麻呂が歌に曰く、「大和島見ゆ」 (15・三六〇八)

武庫の海の 庭良くあらし いざりする 海人の釣舟

波の上ゆ見ゆ (15・三六〇九)

：玉の浦に 船を留めて 浜辺より 浦磯を見つつ 泣く子なす 音のみし泣かゆ… (15・三六二七)

ぬばたまの 夜渡る月は はやも出でぬかも 海原の 八十島の上ゆ 妹があたり見む(旋頭歌なり) (15・三六五二)

我が背子を 我が松原よ 見渡せば 海人娘子ども 玉藻刈る見ゆ (17・三八九〇)

これらの用例をまとめたものが、次の表である。

意味	歌番号(作者)
意	3・二五五(人麻呂)(15・三六〇八注)、3・二五六の一本(15・三六〇九)、6・九四二(赤人)、7・一一九四(藤原卿)、7・二二三三、8・一四五四(金村)、11・二五三〇、11・二七五三、12・三二六七、15・三六〇八、15・三六五二
	14・三三九六
手段を表す	
から(起点を表す)	3・三五七(赤人)、6・九一七(赤人当該歌)、6・九三五(金村)、15・三六二七、17・三八九〇(三野石守)

当該歌では、作中の叙述の主体(われ)の位置、つまり見る「起点」「視座」が、「雑賀野ゆ」という表現で明瞭に示されている。表の用例の作者名を見てわかるように、こ

「笠金村『播磨国印南野行幸歌』について」¹⁶では、右の用例のうちの巻6・九三五番歌の「名寸隅の 船瀬ゆ見ゆる 淡路島 松帆の浦に」の表現を分析し、「ゆ：見ゆ」という表現によって、見る「起点」「視座」が本州側の陸地である「名寸隅の船瀬」に確保されることを論じた。そして、対岸の淡路島との間の「距離」（視距離）が構築されていることを論じた。見る「起点」「視座」を「ゆ」によって明瞭に示す、万葉第三期になって現れるこの方法は、対象までの距離（視距離）や、見る「起点」「視座」から対象までの空間を特に取り上げて叙述することに機能している。笠金村の作品のそのような表現方法を当該歌の横に置いて見る時、当該歌にも、見る「起点」「視座」から対象である「沖つ島」までの「距離」が内在していることに、改めて理解が届く。そして、当該歌の中で描き出されている空間のうちの「最大距離地点」が「沖つ島」であることにも理解が届く。

四 対句表現をめぐって

〈最大距離地点〉「沖つ島」は、「清き」という表現によって讚美されている。そして、その「清き渚」が焦点化されている。「沖つ島」はどのように描かれているのであろうか。沖つ島の清き渚は「風吹けば 白波騒ぎ 潮干れば

玉藻刈りつつ」という対句表現によって描き出される。この対句表現に対して、田中真理氏「景物と人事——山部赤人の対句——」¹⁷は、「景物を対句によって提示し、人事との関わりにおいて読み込む例」と把握する。この対句のうち「風吹けば 白波騒ぎ」について伊藤博氏「赤人の長歌と反歌」¹⁸は、「騒ぐ」は、やはり宮廷讃歌にしばしば登場する「いやしくしくに」（九三二）「たぎつ」（九〇八・九二二）「しきる」（九三七）「多」^{さば}（九三八）などの語と同様、物の多く激しいこと、そしてそれが躍動していることを示す讚美の言語であった」と述べ、「風吹けば 白波騒ぎ」という表現の讚美表現としての質を見定める。また、窪田空穂氏『萬葉集評釈』は、「玉藻刈りつつ」について、「つつ」は、継続「永遠に互つて繰返して行つてゐることとしてのもの。……風に騒ぐ白浪、干潮の海人の藻刈りのさまに感動し、そのことの永遠性を感じた」と述べている。妥当な把握であろう。当該歌ではこの対句表現に永遠性があるからこそ、直後の長歌の結びの表現「神代より 然そ尊き 玉津島山」を導き出している。しかし、「神代より 然そ尊き」と述べるには、この対句だけでは少々説明不足の感はない。

これは、対句の表現のあり方とも関連するので、対句のあり方についてもつと掘り下げて分析しよう。大畑幸恵

氏「赤人の対句——行幸從駕の歌における表現方法」¹⁹⁾は、左のように赤人の長歌十三首の対句部分を掲げる(大畑論文は①②③の用例の対句部分を括弧で括つて載せる。本稿では紙数の都合上括弧を取り、大畑論文の表記そのままに載せた)。

① 渡る日の 影も隠らひ 照る月の 光も見えず

(3・三二七)

② 臣の木も 生ひ継ぎにけり 鳴く鳥の 声も変わらず

(3・三二二)

③ 山高み 河とほしろし

春の日は 山し見が欲し 秋の日は 河し清けし

朝雲に 鶴は乱れ 夕霧に 河蝦はさわく

(3・三二四)

④ 昼はも 日のことごと 夜はも 夜のことごと

(3・三七二)

⑤ 真木の葉や 茂りたるらむ 松が根や 遠く久しき

(3・四三二)

⑥ 風吹けば 白波騒き 潮干れば 玉藻刈りつつ

(6・九一七)

⑦ 畳づく 青垣隠り 川波の 清き河内そ

春へには 花咲きををり 秋されば 霧立ち渡る

その山の いやますますに この川の 絶ゆることな

(6・九二三)

⑧ 野の上には 跡見すゑ置きて み山には 射目立て渡
し

朝狩に 鹿猪履み起こし 夕狩に 鳥踏み立て

(6・九二六)

⑨ 天地の 遠きが如く 日月の 長きが如く

(6・九三三)

⑩ 鮪釣ると 海人船騒き 塩焼くと 人そ多にある

浦をよみ 諾も釣はず 浜をよみ 諾も塩焼く

(6・九三八)

⑪ 青山の 其処とも見えず 白雲も 千重になり来ぬ

漕ぎ廻むる 浦のことごと 行き隠る 島の崎々

(6・九四二)

⑫ 沖辺には 深海松採り 浦廻には 名告藻刈る

深海松の 見まく欲しけど 名告藻の 己が名惜しむ

(6・九四六)

⑬ 山高み 雲そ棚引く 川速み 瀬の音ぞ清き

神さびて 見れば貴く 宜しなべ 見れば清けし

この山の 尽きばのみこそ この川の 絶えばのみこ

(6・一〇〇五)

大畑論文掲載の赤人長歌の対句の用例を一览すると、それらが整然とした形を取っていることがわかる。それに対して当該歌の対句「風吹けば 白波騒き 潮干れば 玉藻

刈りつつ」はどうか。平館英子氏「『風吹けば 白波さわき』考⁽²⁾」は、「当該の二句対において『風ふけば…潮干れば…』の対応は必ずしも一般的ではない。『風』と『潮』とは対偶の関係とは捉えにくい故である。実際に、集中に『風』と『潮』を対応させた例は見られない」と指摘する。『万葉集』中には、確かに、「風」と「潮」を対応させた例は見られない。平館論文の指摘は的確な指摘と言えよう。ところで、犬養孝氏「鶴鳴き渡る——赤人の自然美の造型⁽²⁾」は、「『風吹けば白浪騒ぎ』は満潮時」と述べている。しかし、犬養論文は当該歌の表現すべてを二項対立の図式で把握したいようであり、次の「潮干れば」と合わせて潮の干満で捉えねばならないとする固定観念が強い。この「風吹けば 白波騒ぎ」を潮の干満の局面で捉えなくてはならない理由は無い。表現をねじ曲げてはいけない。さて、大畑論文で示された赤人長歌の対句の整然とした形、平館論文で指摘された風と潮とが待遇とはならない点を考え合わせれば、当該歌の対句は、本来は、

風吹けば 白波騒ぎ 風止めば ○○○○
 潮干れば 玉藻刈りつつ 潮満てば △△△△

とでもあるべきなのだろうか。分析を続けよう。

『万葉集』中の「風吹けば」の用例は当該歌以外に五例ある。そのうちの、

住吉の 沖つ白波 風吹けば 来寄する涙を 見れば
 清しも (7・一二五八)

風吹けば 黄葉散りつつ 少なくも 吾の松原 清か
 らなくに (10・二二九八)

では、前者が「住吉の浜辺」の景の讚美につながり、後者が「吾の松原」の景の讚美につながっている。一方、『万葉集』中の「風止めば」の用例は無い。ここからは、「風吹けば …… 風止めば ○○○○」という対句は形成しやうがないということがわかる。

『万葉集』中の「潮干れば」の用例は当該歌以外に二例ある。そのうちの、

潮干れば 葦辺に騒く 白鶴の つま呼ぶ声は 宮も
 とどろに (6・一〇六四)

という歌は題詞に「難波宮作歌」とある長歌一〇六二番歌の反歌であり、「潮干れば」という表現が難波宮の讚美につながっていることが明瞭である。一方、『万葉集』中の「潮満てば」の用例は当該歌以外に五例ある。そのうちの、

射水川 湊の渚鳥 朝なぎに 潟にあざりし 潮満
 てば つま呼びかはす ともしきに 見つつ過ぎ行き
 …… (17・三九九三)

では、越中国の射水川の河口の景の讚美となり得ていることがわかる。

さて、以上の対句の分析をまとめよう。「風吹けば

…… 風止めば ○○○○」という対句は形成しようがな

かったが、「潮干れば 玉藻刈りつつ 潮満てば △△△

△」という対句の形はあり得たことがわかった。しかし当

該歌はそうなっていない。赤人のその他の長歌の対句は、

さきほど大畑論文を参照してわかるように整然とした対偶

を備えている。一方、当該歌の対句はそのように整然とし

た対偶とはなっていない。「潮干れば 玉藻刈りつつ 潮

満てば △△△△」であつたら、整然とした対句になつた

のであろうが、そうはなっていないのである。我々はこの

ことを考え合わせるべきであらう。このような不完全な対

句になつていふことに対して村瀬憲夫氏「神代よりしかぞ

貴き玉津島山——山部赤人の玉津島讃歌^②」は赤人の未熟さ

に理由を求めるが、別の点に求められるのではないか。

そこで、考えられるのが、当該歌では反歌で「潮が満ち

る」ことを歌う布石となつていふのではなからうかという

ことである。現に、反歌九一八番歌では、長歌で歌われて

いる「玉藻」を受けて「玉藻」が描き出され、その「玉

藻」に「潮が満ちる」ことが歌われる。

前掲大畑論文が挙げる赤人の長歌十三首①～⑬において、

当該長歌は⑧⑫と同じく十五句で最も短い。その⑧⑫には

反歌が一首しか付いていないのに対し当該作品には二首付

いている。ここに、当該作品における反歌二首の果たす役
割の大きさを指摘できよう。

五 反歌二首の空間・時間について

(一) 反歌における見る「起点」「視座」

長歌において、見る「起点」「視座」が確保されている
ことについてはすでに述べた。一方、反歌における「視
座」はどうか。前掲大畑論文は「長歌にその地の景観の全
体的概観を非写實的観念的時間的に、いわばモニタージュ
型に展開し、短歌(反歌)にいたつて逆に、あたふかざり
現実の時点に立つて写實的具象的空間的に心情を表出せし
め」と述べ、際やかな二項対立の図式を指摘している。し
かし、その図式に無理に嵌め込むことによって表現がねじ
曲げられてしまう。大畑論文は「第一の反歌をさらに微細
に見れば、長歌末尾の『玉津島山』をうけてただちに眼前
の『奥つ島』を初句にとり出し」(波線、廣川)と述べるの
だ。長歌では、「雑賀野ゆ そがひに見ゆる 沖つ島」と
いう表現により、見る「起点」「視座」が示され、対象ま
での距離(視距離)が内在している。そして、その見る「起
点」「視座」から、〈最大距離地点〉である「沖つ島」の
「清き渚」が焦点化されている。そうした長歌を受ける反
歌であるから、長歌の見る「起点」「視座」を簡単に無視

するわけにはいかない。もしも無視するのならば、無視する側が無視する論理を説明すべきだ。つまり、犬養論文の波線部「眼前の」という把握は妥当ではないと判断される。反歌における見る「起点」「視座」も、長歌における見る「起点」「視座」を引き継いでいると考えるべきである。こうした前提を確認し、表現分析を地道に続けよう。

(二) 空間について

まず、反歌二首の中で描かれている「空間」について分析しよう。九一八番歌には「沖つ島」とある。この「沖つ島」は長歌の〈最大距離地点〉「沖つ島」を承けており、その点、九一八番歌で描かれている空間としても、当該歌の〈最大距離地点〉「沖つ島」があるわけである。一方の九一九番歌には「若の浦」とある。この「沖つ島」と「若の浦」が表わし出す「空間」について分析しよう。

『万葉集』では「沖」と「辺」に空間的対比・対応を見ることが一般的だが、前掲大畑論文が挙げる「沖辺」には、深海松採り 浦廻には 名告藻刈る(6・九四六)のように、「沖」と「浦」にも空間的対比・対応を見出すことができる。この様相は次の諸例にも見出せる。

年魚市潟 潮干にけらし 知多の浦に 朝漕ぐ舟も

沖に寄る見ゆ

(7・一一六三)

我が舟は 沖ゆな離り 迎へ舟 片待ちがてり 浦ゆ
漕ぎあはむ (7・一一〇〇)

…直向かふ 敏馬をさして 潮待ちて 水脈引き行け

ば 沖辺には 白波高み 浦廻より 漕ぎて渡れば： (15・三六二七)

沖辺より 潮満ち来らし 可良の浦に あさりする鶴

鳴きて騒ぎぬ

(15・三六四二)

一一六三番歌は年魚市潟が干潮になったことを「らし」

によって推定する。その根拠が「知多の浦に 朝漕ぐ舟も 沖に寄る見ゆ」であり、干潮により「浦」には舟を浮かべただけの海水が無くなり舟は「沖」に寄ったと歌われるのだから、「浦」と「沖」の空間的対比・対応が明瞭だ。一一二〇〇番歌は「沖ゆな離り」と禁止して「浦ゆ漕ぎあはむ」と歌い、三六二七番歌は「沖辺」には白波が高く立っているでその危険を避けて「浦廻」を漕いで渡ると歌う。両歌共、「沖」と「浦」の対比・対応が明瞭である。三六四二番歌は「沖辺」から潮が満ちて来たことを推定する。その根拠が「可良の浦に あさりする鶴 鳴きて騒ぎぬ」であり、「沖辺」の空間と鶴が嘴で餌を採る「浦」の空間との対比・対応が明瞭である。

『万葉集』中のこの様相を見出したうえでさらに注目すべきは、当該反歌二首において「沖つ島」と「若の浦」が

配置されている位置である。「沖つ鳥」は第一反歌の初句に置かれ、「若の浦」も第二反歌の初句に置かれている。ここに、当該歌においては、一層の対比・対応が布置されていることを見出せよう。そして、この対比・対応を基盤として、「沖つ鳥」という空間から「若の浦」という空間へと潮が満ちて来ることが歌われているのである。

当該歌の「視座」は、すでに確認したように、長歌の「雑賀野ゆ そがひに見ゆる」にて示されていた。反歌でも視座は陸地の「雑賀野」にあることは動かない。その「視座」から、九一八番歌では長歌と同様に〈最大距離地点〉「沖つ鳥」が焦点化されており、九一九番歌では陸地の視座により近い「若の浦」が焦点化されているわけである。つまり、焦点化される空間が、「沖つ鳥」から「若の浦」へと移動している。重要なことは、反歌二首において、「沖―浦」という対比・対応に基づいて、「沖つ鳥」から「若の浦」へと潮が満ちて来ることが歌われることで、雑賀野から見える空間の全体性を描き出すことが完遂されているということである。長歌では見る「起点」「視座」から一足飛びに〈最大距離地点〉「沖つ鳥」に飛び、作品内に「距離」「空間」が構築されていた。つまりここに、長歌で構築された「距離」「空間」を反歌が綿密に説明して埋めるという方法を見出せよう。この綿密な説明により、

空間の全体性が得られているのである。この「全体性」は、次に述べる時間の永遠性に対して重要な根拠を与える。次には反歌二首の時間について見てみよう。

(三) 時間について

契沖『萬葉代匠記』（精撰本）は「干潟ト成レル所へ、又塩ノ満来ルヲ云ヘリ」と述べ、少々分かりづらい九一八番歌第三句の「潮干満ち」への説明が果たされた。この部分の時間について橘千蔭『萬葉集略解』は「今潮干なるが、後に満む事を云也と、宣長言へり」と指摘する。一方、窪田空穂氏『萬葉集評釈』は「干潮より満潮に移らうとしてゐる時」と指摘する。九一八番歌における時間が、『略解』引用の宣長説のように後で満潮になることを想像するそのような時間であるのか、『窪田評釈』のように今まさに干潮から満潮に向けて潮が満ち行く時間であるのかは、にわかには決められない。ここでは続けて、『窪田評釈』の九一九番歌の解説を見ることが肝要であろう。『窪田評釈』は「前の歌に続いてのもので、これは満潮となつて来た時の光景である」と述べている。つまり、九一八番歌から九一九番歌への時間の経過を指摘しているわけである。たとえ『略解』のように捉えたとしても、九一八番歌から九一九番歌へのこの「時間の経過」は、見出すことができるわ

けであり、妥当な指摘と言えよう。また、吉井巖氏『萬葉集全注 巻第六』は九一九番歌の「潮満ち来れば」の「来る」について、「来ルは次第に程度をましてくる意を示す補助動詞。『降りくる』(3・二六五)、『秋さりくる』(一〇四七)、『明けくる』(15・三六二五)等。ほとんど満ちてくるので。」と有用な指摘をなしている。つまり、反歌二首の中には、九一八番歌から九一九番歌にかけての時間の経過が内包されているばかりでなく、九一九番歌自体の中にも、ほとんど潮が満ちて来る、という時間の経過が内包されているのである。

さきほど、当該歌では、「潮干れば 玉藻刈りつつ 潮満てば △△△△」という対句ではなく不完全な対句になっていることが、反歌で「潮が満ちる」ことを歌う布石となつていいるのはなからうかと述べた。そうした布石に基づき応じるがごとく、反歌では、長歌では描かれなかった「満潮時」の「玉藻」の様相が描かれる。しかし、反歌が引き受けているのは「玉藻」という表現だけではなからう。ここで、前掲『窪田評釈』の記述をもう一度参照しよう。『窪田評釈』は長歌の「玉藻刈りつつ」の継続「つつ」に注目することで永遠性を指摘していた。長歌の「玉藻」には永遠性の表象の要素があるのであるから、それを受ける反歌の「玉藻」もその要素を受けている。つまり、反歌に

おける「潮干満ち い隠り行かば 思ほえむかも」という「玉藻」への思慕の念も、ずっと繰り返されて来、そしてこれからもずっと繰り返されるであろう思慕の念であることが表象されていると捉えられよう。つまりここには、「玉藻」をめぐって、(これまで繰り返されて来た時間)と(これからも繰り返されるであろう時間)という永遠性が表象されているのである。

この点を十分に理解した上で、長歌で干潮が描かれ、反歌で干潮から満潮への時間と満潮が進み行く時間が綿密に描かれていることに、もう一度目を向けよう。長歌の干潮から反歌の満潮へ、そして反歌の干潮から長歌の満潮へ、これは、繰り返される時間である。ここには神代の昔より繰り返されて来た営みを見出すことができよう。そしてこうした繰り返しの時間は、長歌末尾の「神代より 然そ尊き」という讚美への説明となり得ている。

先ほど、長歌の対句の部分だけでは「神代より 然そ尊き」の説明としては少々説明不足であると述べた。長歌の対句が不完全であることが、反歌で満潮を呼び込むことの布石となり、そして反歌二首によって干潮から満潮への時間が綿密に描かれるのであった。そしてこの構成により、長歌・反歌が一体となり、これまで繰り返されて来た時間、これからも繰り返されるであろう永遠の時間が表わされ、

「神代より」へのまつたき説明となつてゐるのである。長歌と反歌とが一体となつての表現効果の様相を、ここに指摘できよう。

六 まとめ

当該紀伊国行幸歌の主眼は、「神代より 然そ尊」と詠み、その尊い様相が神代の昔より継続して不斷であることをもつて玉津島を讚美することにあつた。このことは動かない。問題は、その永遠性が保証されていることを、どのような方法に基づいて描くかである。

当該歌では、「ゆ：見ゆ」によつて把握されるところの空間把握が有効に機能している。つまり、作中の叙述の主体（われ）の位置、見る「起点」「視座」が明瞭に示される空間把握が有効に機能しているのだ。この「ゆ：見ゆ」によつて作品内の「最大距離地点」「沖つ島」が焦点化される。そして、その「最大距離地点」「沖つ島」から「若の浦」までの空間の全体性が綿密に描き出される。この空間の全体性の描写と不可分である形で、潮が満ち来る時間の経過も綿密に描き出される次第となつてゐる。この時間の全体性は、潮の満ち干という永遠の繰り返し・継続をも描き出す。そしてこれが「神代より 然そ尊き」ことの永遠性を保証するのである。当該歌では、空間把握に基

づく空間の全体性の描出が時間の永遠性の表出に対しての根柢を与える方法が採られている。そして、その方法が讚歌としての機能を十分に果たしている。

注

- (1) 本稿は、当該歌の本文を掲出するにあたり、閲覧可能な写本は複製にて確認し閲覧不可能な写本は『校本萬葉集』の記述を参照し本文校訂作業を施している。題詞や左注はその校訂作業を施した原文を掲げ、歌は校訂作業を施した原文を基にして新編日本古典文学全集版『萬葉集』（小学館）の書き下しに拠り適宜書き下している。
- (2) 引用は新日本古典文学大系版『続日本紀』に拠り、日ちの記述を補った。
- (3) 日下雅義氏「紀伊湊と吹上浜」（安藤精一氏編『和歌山の研究 第一巻 地質・考古篇』一九七九年三月、清文堂）
- (4) 北山茂夫氏「神亀年代における宮廷詩人のあり方について―山部赤人、その玉津島讚歌の場合―」（『文学』四五一四、一九七七年四月）
- (5) 久米常民氏「万葉集自然詠における仮構性」（『萬葉集の詠歌』、一九六一年七月、塙書房）
- (6) 坂本信幸氏「赤人と自然」（『国文学 解釈と教材の研究』一九八八年一月号）
- (7) 坂本信幸氏「赤人の玉津島從駕歌について」（『大谷女子大國文』一五、一九八〇年二月）

- (8) 村山出氏「玉津島の讚歌―基礎的考察―」(『奈良前期万葉歌人の研究』、一九九三年三月、翰林書房。初出、一九八四年八月)
- (9) 廣岡義隆氏「赤人の若の浦讚歌」(『和歌の浦―歴史と文学―』、一九九三年五月、和泉書院)
- (10) 山崎良幸氏「『そがひに見ゆる』考」(『万葉歌人の研究』、一九七二年七月、風間書房)
- (11) 小野寛氏「『そがひに』考」(『大伴家持研究』、一九八〇年三月、笠間書院。初出、一九七九年四月)
- (12) 吉井巖氏「萬葉集『そがひに』試見」(『萬葉集への視角』、一九九〇年一〇月、和泉書院。初出、一九八二年二月)
- (13) 垣見修司氏「『そがひ追考』」(『高岡市万葉歴史館紀要』二二、二〇〇二年三月)
- (14) 池上啓氏「ソガヒについて」(『学習院大学上代文学研究』一一、一九八六年三月)
- (15) 清水克彦氏「赤人における叙景形式の変遷―仮称「原赤人集」の構造から―」(『萬葉論集 第二』、一九八〇年五月、桜楓社。初出、一九七七年九月)
- (16) 廣川晶輝「笠金村『播磨国印南野行幸歌』について」(『美夫君志』八九、二〇一四年一月)
- (17) 田中真理氏「景物と人事―山部赤人の対句―」(『日本語と日本文学』四二、二〇〇六年二月)
- (18) 伊藤博氏「赤人の長歌と反歌」(『萬葉集の表現と方法』下、一九七六年一〇月、塙書房。初出、「赤人の吉野讚歌」、一九六〇年二月)

(19) 大畑幸恵氏「赤人の対句―行幸從駕の歌における表現方法―」(『稲岡耕二先生還暦記念 日本上代文学論集』、一九九〇年四月、塙書房)

(20) 平館英子氏「『風吹けば 白波さわき』考」(『高岡市万葉歴史館紀要』一〇、二〇〇〇年三月)

(21) 犬養孝氏「鶴鳴き渡る―赤人の自然美の造型―」(『萬葉の風土』続、一九七二年一月、塙書房。初出、一九六〇年八月)

(22) 村瀬憲夫氏「神代よりしかぞ貴き玉津島山―山部赤人の玉津島讚歌―」(『美夫君志』四三、一九九一年一〇月)

〔附記〕

本稿は平成二十六年度上代文学会秋季大会研究発表会(二〇一四年一月三〇日、於早稲田大学)における研究発表に基づく。当日御教示を賜りました諸氏に御礼申し上げます。また、本稿投稿後に貴重な御教示を賜りました編集委員の諸氏にも御礼申し上げます。